

# Culture in Psychiatry



C  
CINEMA

## 国を追われるのは年老いた者か、 それとも道を踏み外した者か

—ノーカントリー—

小澤 寛樹 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経科学教授

国会での答弁を聞いていて、質疑に応じる話者の落ち着き払った態度にある種の感銘を受けることがあります。とある国の指導者の演説での話しぶりに思わず引き込まれて聞いてしまうこともあります。ところが後でその中身を精査してみると、まったくの出鱈目だったり、到底実現できないような夢物語だったりといったことがわかって、よくもまあ嘘をつくのにあんなに堂々と振る舞えるものだと、かえって感心してしまうこともあります。

カナダの犯罪心理学者ロバート・D・ヘアの定義によると、慢性的に平然と嘘をつく、口が達者で表面は魅力的、行動に対する責任が全く取れない、罪悪感が皆無といった特徴をもった反社会的人格を精神病質 (psychopathy) と呼び、その人格を備えた精神病質者のことをサイコパスといいます。先に挙げたスピーカーたちが精神病質者かどうかはもう少し調べてみないとわかりませんが、少なくとも公の場で平然と出まかせを並べ、表面上の魅力で聞き手にそれを信じ込ませてしまうといったサイコパス的特性を備えていることは間違いなさそうです。

精神医学では、精神病質は類似する

概念である社会病質 (sociopathy) と同様に反社会性パーソナリティ障害として扱われます。精神病質は性格や気質などの生物学的要因に関係し、社会病質は家庭環境などの後天的要因との関連がより強いとされています。その発生率には男女差や地域差があるようですが、北米ではなんと人口の4% (25人に1人) が精神病質者であるという説もあるほどで、本当に私たちの身近にいる人たちだということがいえます。

映画の世界でもサイコパスは古くからその反社会性や暴力性がフィーチャーされ、あまたの凶悪犯罪者の登場人物がもつエッセンスとして、または作品そのもののテーマとして取り入れられてきました。ベルギーの精神医学教授 Samuel Leistedt が1915～2010年の間に公開されたサイコパスに関連する400本の映画を調べたところ、そのほとんどがステレオタイプに基づいて創り出されたリアルさを欠いたサイコパスばかりだったそうですが、それでもなかには「真の」サイコパス的性質をもった登場人物が3人いたといいます<sup>1)</sup>。

1人目は1931年のドイツ映画『M』に出てくるハンス・ベッケルト、2人目

は実在する連続殺人犯を描いた1986年の映画『ヘンリー』のヘンリー・リー・ルーカス、そして3人目が、今回取り上げる2007年の映画『ノーカントリー』に登場するアントン・シガーです。

物語の舞台は1980年代のテキサス。ベトナム帰還兵のモス (ジョシュ・ブローリン) は狩りの途中で偶然、麻薬取引が決裂し銃撃戦になったと見られる現場跡から多額の札束が入ったブリーフケースを発見し、それを持ち去ってしまったことから、組織が雇った追手のシガーに執拗に追われることになります。シガーを演じたハビエル・バルデムは、独特な風貌で顔色一つ変えずに冷酷な行為に及ぶこの役でアカデミー助演男優賞を獲得しました。

一般的に殺人鬼の武器として最初に思い浮かぶのはマシンガンや斧の類ではないかと思いますが、シガーは家畜の頭にボルトを打ち込む屠畜用の銃とエアボンベを携えています。これは見た目の薄気味悪さを高めるのにも一役買っていますが、この武器のチョイスも、目的を果たすためには手段を選ばないサイコパスの特性をよく表現しているのではないかと思います。家畜銃であればさほど警戒